



「チェルノブイリ救援・中部」とその支援者に
ステファニ・レナト賞が贈られました! 【10月28日 授賞式にて】

このたびは、私たちの地道な活動に対して、NGOの団体にとってはたいへん名譽な「ステファニ・レナト賞」をいただくことになり、本当にありがとうございます。実行委員の方々に、厚く御礼申し上げます。

私たちは、1986年4月に旧ソ連ウクライナ共和国で起きた「チェルノブイリ原発事故」の被災者支援を、16年にわたり続けています。この事故は、500万人にもものぼる被災者



小池康弘実行委員長からステファニ・レナト賞を受けるチェルノブイリ救援・中部の市原佳代代表部一名古樹・栄のオアシス21で

「チェルノブイリ救援・中部」代表
ステファニ・レナト賞表彰式

風化懸念、復興にも力

を出しましたが、私たちには、とてもすべての被災者を支援することができませんでしたので、支援先を放射能の影響を最も受けた「ウクライナ・ジトーミル州」に絞りました。このことが、息の長い支援を可能にさせた要因の一つだと思っています。

今回の受賞理由のひとつに、「現地との交流の深さ」がありますが、この点につきましては、私たちは自信を持っています。毎年、市民の方々から寄せられた1,000通以上のクリスマスカードを、現地で入院中の子ども達や孤児院の子ども達に贈り、たいへん喜ばれています。また、年に2回は現地に赴き、被災者や活動のパートナーの方たちとの親交を
 (次ページへ続く)

〒466-0822 名古屋市昭和区楽園町137 楽園アパート1-10

チェルノブイリ救援・中部 代表：市原佳代

郵便振替：00880-7-108610

TEL/FAX：052-836-1073 (月・水・金 10:00~17:00)

E-mail：chqchubu@muc.biglobe.ne.jp

ホームページ：http://www.chernobyl-chubu-jp.org

温め、酒類を築いています。今までに4回のスタディツアーを行い、関連施設を訪問するだけでなく、現地の一般市民の方々を巻き込んでイベントを繰り広げ、楽しいひとときを過ごしてきました。

また、交流のほか、医薬品や医療機器・汚染されていない粉ミルクの支援、現地の医師や医療技術者の養成、被災者の子ども達への奨学金制度など、支援は多岐にわたります。他のチェルノブイリ救援団体からは、「救援のデパート」と異名をとられるほどです。

そして、私たちは今、これまで行ってきた緊急支援の形から、復興開発へと転換を図ろうとしています。それは、今年9月よりスタートした「ナロジチ再生・菜の花プロジェクト」です。ナロジチとは、原発から約70キロのところにある汚染地域です。国の経済混乱から移住政策が破綻し、今でも1万人の人々が暮らしています。子ども達も1,500人以上います。事故後、ナロジチでは、ガン・結核・心臓病が増え、自殺者も少なくありません。子ども達は、75%が病気にかかり、40%が2つ以上の病気で苦しんでいます。私たちはこの地域で、放射能除去とエネルギー問題の解決に取り組みます。そのキーワードが菜の花です。菜の花は根っこから放射能を吸収し、種皮に蓄積することがわかっています。しかし、放射能は菜種油には溶け込まず、油の搾りかすや、茎や根っこ、葉っぱに残ります。私たちは、ナロジチで菜の花を栽培し、その根っこや葉っぱからメタンガスを作り、菜種からはディーゼルオイルを作ります。

今年はちょうど事故から20年です。通常の災害であれば、20年も経てば再開発され、災害の跡を見つけることは難しいでしょう。しかしナロジチでは、復興の見込みはありません。産業がなくなってしまったため、人々は生活にも困っており、畑を耕すトラクターを動かす燃料がありません。汚染されていない食料を買うこともできず、汚染された土地で育った牛の乳を飲み、汚染された森でとれたきのこを食べています。そうして、体内被曝が起きている体で、子どもを産みます。魔の食物連鎖です。私たちは、菜の花を栽培し、土壌を浄化し、食物連鎖を断ち切り、エネルギーを生み出します。この計画が成功すれば、ナロジチの人々に希望を与えることができるのです。

私たちの活動には、事故の風化を防ぐという、とても重要な目的があります。今日、大勢の方々の前で被災地の深刻な状況を知っていただく場を与えてくださったことに、深く



感謝しています。NGOの活動は、「一日のうち数分でもいいから、地球上の弱者に目を向けることから始まる」と私は考えます。その人たちを応援する意味でも、ステファニ・レナト賞の存在意義は大きいのです。私たちもこの賞の名に恥じぬよう、今後も活動の手をゆるめず、がんばっていきます。ありがとうございました。

(市原佳代)

伊那で

「菜の花プロジェクト」調査報告会

長野県南箕輪村 原 富男

11月19日、伊那市の隣の南箕輪村民センターで、「菜の花プロジェクト調査報告会（参加人数 20 数名）」を開きました。これは今年9月の現地調査の様子を、伊那地区の人々にも知ってもらい、今後の進め方についての相談をするために行われたものです。

報告は「伊那谷いのちがたいじ！連絡会（チェルソのメンバーでもある）」の原 富男と、「伊那谷菜の花楽舎」の関 浩行さんの2名で行いました。ウクライナのナロジチ地区に馴染みがない方もいたので、小牧さんから丁寧なナロジチの説明があり、その後2名から報告をしました。

報告に続き、質問と今後のプロジェクトの進め方についての話し合いが行われました。「バイオディーゼル燃料は、冬場に使えるのか？」とか、「菜の花を作りつづけることによる、連作障害はないのか？」とか、「放射能を吸収する他の植物はないのか？」などの質問に続き、この計画の進め方についての話し合いが行われました。「放射能の吸収から、この計画全体までのデータや数値を示して欲しい」という意見や、「バイオガスの醗酵槽に投入する根茎葉は、事前にチップ化するとともに、醗酵を促進させるために、事前に堆肥化してから投入してはどうか？」という意見も出されました。この計画自体まだまだ未熟であり、苦言も含むたくさんの意見が、寄せられ練られなければなりません。その意味でも、伊那地域の人達が、この計画を身近により具体的に考えていることが判り、大事なヒントも得ることができた集まりでした。



ウクライナ訪問への期待



アルプス開発技術研究所 所長

NPO 法人 伊那谷菜の花楽舎 理事 前澤 功

「チェルノブイリ救援・中部」の要請を受けて、ウクライナを訪問することになりました。現在、「伊那谷菜の花楽舎」の理事であり、バイオディーゼル燃料製造設備の設計者でもある私としては、何を差し置いても協力してみたいと思う事業でした。

チェルノブイリの事故後16年に渡り、ウクライナ・ナロジチ地区への支援活動を行ってきた「チェルノブイリ救援・中部」の活動は、さまざまな機会に目にしてきました。日程の都合等、クリアしなくてはならない問題が山積みでしたが、現在持っている知識・技能を役に立ててみたいという“技術者魂（小さな思いではあるが）”のような物に火がついた気がしました。

私は、ほぼ30年間、機械・設備・プラント・床暖房等など、多くの開発及び設計を行ってきました。「技術は平和のために使うもの」という大前提のもと、自分の技術を人の役に立てたいという思いで、黙々とやってきました。しかし、30代後半から、化石燃料の枯渇や、二酸化炭素の増加による地球温暖化現象・オゾンホール拡大・騒音・電磁波問題など、技術発展に伴う弊害が多く現れ、自分の行っている技術開発・設計という代物に、危機感を覚えてきました。「今、することは何か？」という自問自答の結果、身近なバイオマスエネルギーでもある「廃食油のバイオディーゼル燃料化」技術の独自開発、及び、製造装置の製造にたどり着いたのです。

この技術を使い、放射能汚染の除去という画期的事業に参加・協力できる機会を与えられ、非常に光栄だと思っています。

5月出航の船便について

車椅子や医療機器等、私たちの救援物資を載せた船は、5月2日に出航し、6月2日オデッサに到着しましたが、例によって通関が遅れに遅れ、9月8日にやっと手続きが終わり、その後これら救援物資はジトーミル市立小児病院に届けられました。救援物資は、車椅子12台（新品2台、中古10台）、超音波診断装置（中古）1台、パルスオキシメーター（中古）2台、その他使い捨て注射器など多数の医療品です。車椅子は市立小児病院の他、障害を持った子どもやバラノフカ地区のホスピスにも提供されました。

尚、この船便輸送には、(特活)アルシュ(自立を支援する会)の第一回かけはし支援基金から、10万円の助成をいただきました。

以下は、ジトーミル市立小児病院・バシエク院長からのメッセージです。

(山盛)

チェルノブイリ救援・中部 様

拝啓

ジトーミル市立小児病院の医療スタッフを代表して、救援物資を受領したことについて心から感謝を申し上げます。

荷物は通関し、我々はすでにその荷物の中にあつた機器と薬剤を使用しています。〈アロカ(注:超音波診断装置)〉を我々は修理しました。それは働いています。残念ながら、我々はそれを用いて腹腔の検査しかできません。腰部用のセンサーしかないからです。心臓用のセンサーを我々は緊急に必要としています。パルスオキシメーターが、我々には特に役立ちました。それについて、特に感謝したいと思います。

12台の身障者用車椅子のうち、2台を修理しなければなりません、いずれ行うつもりです。3台の車椅子は、すでに手渡されました。残りは、国際身障者デーの12月3日に手渡されます。

我々職員と患者一同は、日本の市民の援助をありがたく思っています。私は、あなた方の援助のおかげで治療がうまくいっている患者達の両親からの感謝をお伝えします。 敬具

ジトーミル市立小児病院 院長 ウラディーミル・バシエク

ウクライナ講座「ナロジチ再生・菜の花プロジェクト・事前調査—9月訪問団報告」開催

9月30日に行われたウクライナ講座では、今回の調査の様子などを撮影した宮腰さんのビデオ上映、そして、河田さんと原さんからは調査報告をしていただきました。宮腰さんは、今後も、菜の花プロジェクトのドキュメンタリー映像を撮影し続けたいとのこと、次回の上映がとても待ち遠しいです。

当日は、名古屋 NGO センターのボランティア養成講座の研修の一環で、研修生が参加、プロジェクトの内容と取り組みに感動の意を表してくれました。これを励みにして、ますます意欲的に活動していきます。

(市原)



SKIP のみなさんとカード作りをしました

原発事故で苦しむ子励まそう



チェルノブイリの子どもたちに送るクリスマスカードをつくるSKIPのメンバーら一名古屋市立女子会館で

市民団体「風化させぬ」

心いじめ被災地にカード

10月23日(日)名古屋市女性会館で、昨年が続いて今年も、NPO 法人 SKIP のみなさんがクリスマスカード作りの場を設けてくれました。

NPO 法人 SKIP は、「子育てで忙しい中ではあるけれど、私らしくありたい」という想いに共感した仲間が集まり 1993 年に結成され、「託児付きイベント」の企画・運営を行っているグループです。昨年より参加者は少なかったのですが、チェル教から研修生の山田さんと竹内さんも参加してくれたので、年齢も性別もいろいろで、話も弾みました。

はじめに、カードキャンペーン担当の山田さんが、あらかじめ用意したレジュメやナロジチの写真を見せながら、チェル教の活動やカードキャンペーンの意義などを話しました。

続いて、昨年も教えてもらったのにすっかり忘れてしまった「折り紙で作る二通りのサンタクロース」の折り方教室です。研修生のふたりには、「これだけはマスターしてね」と SKIP の方がつききりで教えてくれました。「鶴を折ったこともない」という竹内さんは、悪戦苦闘していましたが、なんとか時間内にできたようです。ナロジチの子ども達は、鶴を「幸福の鳥」といって、折ることができるようになったそうです。山田さんは、昨年送ったカードに対するウクライナの子ども達のお礼の手紙を、何通か朗読してくれました。そして、折り紙を並べたり、クリスマス用の包装紙からサンタの顔をいっぱい重ねて貼った「ばらばら絵本」のようなユニークなカードなどができあがりしました。



チェルノブイリ事故から 20 年たった現在の様子や、菜の花プロジェクトについてもいろいろ質問ができました。正確に答えられたかどうか不安なので、呼びかけのリーフレットができたなら、SKIP の事務局に送ろうと思います。(橋本)

*****NPO 法人 SKIP 主催のクリスマスファミリーコンサートのお知らせ*****

名古屋で活躍する演奏家 8 人による楽しい室内楽です。
クリスマスソングから映画・アニメ音楽まで、ご家族皆様さんでお楽しみください。

日時：12月25日(月) 11:00~12:15

場所：ザ・コンサートホール(伏見：電気文化会館)

会費：おとな(中学生以上) 2,200 円/子ども(3歳以上) 2,000 円

託児：おひとり 1,100 円(含むおやつ代)

チケットと託児の申し込み先 SKIP 070-5644-4804



《ミルクキャンペーンのお知らせ》

チェルノブイリ原発事故が起きて、早くも 20 年が経ちました。それは人々の記憶からは過去のできごととして忘れ去られているかもしれませんが、しかし、現在も続く放射能被害に苦しむ人々にとっては、**2006 年現在の事故**とも言えるのです。

チェルノブイリ原発事故により 10 日間に放出された放射能は、人体被害にもっとも影響のあるセシウムのみをとれば、あの広島原爆の **500 倍**になります。

そして、その被曝の影響の最たるものが、汚染した食物や粉塵の吸引による**体内被曝**です。それはウクライナ国民全体の総被曝線量の 70~80% に及びます。

体内被曝は、**母乳**にまで及び、それを口にした赤ちゃんへと被曝は**連鎖**を起こしています。

そこで、「チェルノブイリ救援・中部」では、皆様からいただいた募金をもとに、母乳の代わりとなる汚染していない（＝検査済みの）粉ミルクを、病気の赤ちゃんにとっては薬にもなる粉ミルクを、貧困のためミルクを買うことのできない人々に贈ります。一人でも多くの子ども達が、元気に育つことを願っています。

国内に多くの原子力発電所を持つ日本にとって、**チェルノブイリは明日の我が身**です。決して他人事ではありません。

また、**未来を支えるのは子ども達**です。現在、支援先の小児病院（ジトーミル市立小児病院）では、ミルクの予算が大幅に不足しています。被災地の人々へ未来を届けることにもなる**ミルクキャンペーン**へのご協力をよろしくお願いします。

<自己紹介>

こんにちは。竹内と申します。現在ミルクキャンペーンを担当しています。ボランティアに参加するのは初めてなので、新鮮な日々を過ごさせてもらっています。不安もありますが、やりがいのあることだと思います。頑張りますので、ご協力をお願いします！



山田さん

竹内さん



2006 チェルノブイリの子ども達へ

クリスマスカードを贈ろう!



今から20年まえ、1986年4月26日、広島、長崎に落ちたとされる原爆の数倍の放射能が、空高く舞い上がり、ウクライナ・ベラルーシ・ロシアそしてヨーロッパ諸国へと、広大な大地に降り積もりました。放射能に汚染された土壌が元に戻るには、300年かかると言われています。そして、被災した親から生まれ、甲状腺ガン・白血病などで苦しむ子ども達は、今でもたくさんいます。放射能に汚染された地域に住む子ども達は、時間の経過とともに社会から見放されていくのではないかと不安を抱えて生きています。

「チェルノブイリの子ども達へ、クリスマスカードを贈ろう!!」…救援当初から続けているこのキャンペーンを、ウクライナの子ども達は毎年楽しみに待っています。遠い日本から届くカードは精神的な支えとなり、彼らの心を暖めているのです。事故から20年経った今でも決して忘れず、彼らの苦しみを理解しようと努めることが、一番の救いになると信じています。

世界中の誰にも訪れるクリスマス。この日をともに迎えることができた喜びを、分かち合いましょう。

【参加方法】

1. カードを作ります(手作り、市販のもの、絵葉書など、素材は何でも結構です)
※現地公用語はウクライナ語ですが、日本語でも英語でも、ロシア語でも何でもOKです。
2. カードを封筒に入れ(のり等での封書は不要です)、さらにひとまわり大きい封筒にいれて、当事務局までお届けください。
3. みなさまからいただいたカードを事務局でまとめ、現地へと発送いたします。その際、ウクライナ語のあいさつ状や折り紙、日本の写真なども同封する予定です。子ども達に見せたい日本の風景や、折り紙などございましたら、こちらも大歓迎です。その他、みなさまのアイデアで子ども達に笑顔をお届けください! (ただし、発送の都合上、大きさはカードと同等の大きさ程度のものでお願いいたします。)

【締め切り】12月13日(水)必着

【カードの送り先/問い合わせ先】

チェルノブイリ救援・中部

〒466-0822

名古屋市昭和区楽園町137

楽園アパート1-10

電話・FAX: 052-836-1073

(月水金 10:00~17:00)

E-Mail: chochubu@mucbiglobe.ne.jp

自己紹介>>

みなさん、はじめまして! 山田 真嗣(マサツグ)と申します。今年10月より来年3月までの半年間、研修生として勉強させていただくことになりました。このような勉強の機会を得たことを、たいへん幸運に思います。よろしくお願ひいたします!

10代にはボーイスカウトを通して、ボランティア活動にかかわってきましたが、その後はさっぱり活動から遠ざかり、会社勤めのかたわら自分探しの旅を続けていました。常々40歳あたりが転機と考えており、その歳に近くなった今、人生観を変える意味でも、活動に参加することに決めました。

NGOという切り口から、運命的にも「チェルQ」に巡り会いました。やることすべてが新鮮で、人間くさいところが魅力です。失いかけていたものを、取り戻せそうな気がします。長いようで短い半年間だとは思いますが、全力で頑張りますので、よろしくお願ひいたします。

【自分】名古屋市出身。10代にボーイスカウトを通してボランティア活動にかかわる。学生時代から旅行(バックパッカー)を重ね、はたまた仕事で頻りに渡航をし、世界を知ったつもりになる。旅のなかで、妻と出会い結婚、現在5歳と2歳の2児の父親になる。活動をはじめてから、妻に「とても生き生きしてるね!」と言われます。

**東京平和運動センターから
2,500ドル(30万円)の寄付を
いただきました!**

<一時的に帰国中だった、竹内さんからのメール>

11月18日、東京でのコンサート会場に、東京平和運動センターのスタディ・ツアーに参加された杉山さんと増村さんが来られ、2,500ドルをお預かりしました。

帰国後の23日にジトーミルへ出かけ、キリチャンスキー氏に手渡しました。この寄付金は、**ナロジチ地区病院のボイラー室整備工事**に使われます。

<平和運動センターの機関誌から…>

私達のスタディ・ツアーは、「日本の原発や六ヶ所村の再処理工場で大事故が起きたらどうなるか?」「政府が進めるプルサーマルや震災による事故などを、無視して進める政策に対してどうするか?」などに対して、気持ちを新たにできました。

また、「今なお健康を害し、厳しい生活や入院生活をしているチェルノブイリの子ども達や被災者への救援や支援に、いかに取り組むか?」も大きな宿題となりました。

キエフ市では、チェルノブイリ博物館の見学、強制移住区域(プリピャチ市)からの移住者団体「ゼムリヤキ」との交流会、ジトーミル市では消防博物館の見学、チェルノブイリ事故の被災者や家族を救援している組織「チェルノブイリの消防士たち基金」の活動状況や現状を聞き、意見交換をしました。(中略)今回のツアーの教訓を生かし、核廃絶・反原発の運動を進め、また、チェルノブイリの被災者への救援活動のあり方を早急に検討するの必要を感じました。

'06 アルシュ「スタディ・ツアー報告会」に参加しました。

11月26日(日)、なごや国際センター第1研修室において、アルシュの定例イベント「'06 アルシュ」が開催されました。「特定非営利活動法人アルシュ」は、日本国内で集められた支援物資を、国内外でそれを必要とする人々へ届ける橋渡しの活動をしています。今回のイベントは、「海外支援は、スタディ・ツアーを通じて始める機会が多い」ことに注目し、企画されたものです。

この報告会は、各団体関係者だけでなく一般の参加者にも広く広報されました。海外支援活動に縁遠い方にも、支援活動の理解を得ることや、単に海外旅行ではなく「スタディ」も大切な目的と考えて各団体が企画した、スタディ・ツアーの参加も期待しての報告会となりました。

愛知県内で活動している10の海外支援団体が集まり、今までに行ったスタディ・ツアーの魅力や苦労を報告し合い、情報交換をする機会となりました。

今後の企画の参考にし、より良いスタディ・ツアーを計画したいと思います。(美)



<チェルノブイリの消防士たち基金の事務所で>

石油資源は確実に減っている。そこで、また原子力を復興させようと、アメリカや日本の原子力産業は狙っている。しかし、原子力もまた地下埋蔵資源であるウランに依拠するのであり、いずれなくなる。何よりも、原発には事故や廃棄物問題がある。第2のチェルノブイリを起こさないためには、安全で持続可能なエネルギーの開発を進めるしかない。それが今、世界の緊急課題であり、世界はバイオエネルギーに大きな期待をかけている。

● 2種類のバイオエネルギー

自動車の燃料は、ガソリンと軽油である。ナ
 ○ネ・ディーゼル油や、今日で行われている
 廃油ディーゼル油は、勿論ディーゼル専用である。一方、ガソリン車に使うバイオ燃料はアルコールである。ブラジルは、さとうきびの絞り粕から作るアルコールで、単ばかりか飛行機まで飛ばし、今や世界のバイオエネルギー大国である。日本の自動車産業も、今後、アルコール燃料で走る車を、輸出用に生産するらしい。こうして、世界はバイオ・ディーゼルとアルコール燃料に向かって大きく変わりつつある。EUでは、バイオ・ディーゼルにはナタネを、アルコール燃料にはテンサイを利用する方向だ。また、アルコールはセルロースの分解でも生産できるので、木材チップも利用可能である。日本で
 ○取り壊した家屋の木材などからアルコールを作る試験プラントがまもなく稼働する。しかし、アメリカのようにバイオ・ディーゼル油を大豆から、アルコール燃料をトウモロコシから作るのは反対である。世界には、日々の食糧に事欠く飢饉線上の人々が、何億人もいるのである。食用作物からバイオ燃料を作るのは邪道である。

● 日本はかつて菜種大国であった

「菜の花畑に入日薄れ…」という童謡もあるように、日本はかつて菜種大国であった。

寒い北海道から暖かい九州まで、ナタネは国内何処でも栽培され利用され、その面積は約

30万畝もあったという。それが、アメリカやカナダから、大量の遺伝子組換え大豆やトウモロコシ・ナタネが輸入されるようになり、国内のナタネ栽培は激減した。今では300畝にも満たない。一方、ドイツでは現在117万畝でナタネが栽培されている。日本の「ナタネ・プロジェクト」は、各地でようやく始まったばかりである。日本も今後、脱原発に向けて、様々なバイオエネルギーをはじめとする、持続可能なエネルギー開発に向けて、技術開発や制度の整備を進めなければ、第2のチェルノブイリを国内で起こしかねない。原子力産業は、解体すべきである。

● ナロジチを脱原発の基地に

放射能で汚染されたナロジチでナタネを栽培するのは、エネルギー資源に乏しいウクライナにとっても大きな意義がある。ウクライナはかつて石炭の豊富な国であったが、ソ連時代にすっかり掘り尽くし、今は危険な場所での採掘で、落盤や火災による事故が頻発している。石油や天然ガスも採れないウクライナの国産エネルギーは、皮肉にも原子力なのである(ウランが採れる)。しかし、チェルノブイリの恐ろしさを最も良く知っているのも、ウクライナの人々である。

ナロジチでバイオエネルギーを生産し、人々の生活を復活させるだけでなく、脱原発の基地として再生できたら、というのが私たちの夢である。(河田)

キエフ留学日記—初冬編

(戸村京子)

<季節の移ろい>

本格的な冬はまだ…ウクライナでは、10月後半から4月半ばまでの半年間が「冬」ですが、今年は異様に暖かい日が続き、“黄金の秋”の黄葉も、いまひとつのまま、ある夜の突然の寒さに色づかないまま散ったりしていました。今はカシタンも白樺も殆んど裸木の冬景色ですが、2週間ほど前に降った初雪はすでに消え、外の日中の気温はプラス5℃を前後しています。



“5点セット”…気温がマイナスに下がり雪が降ったことから、厚いコート・帽子・マフラー・手袋・ブーツの完全装備の人が多いのですが、この“5点セット”で街を歩いていると、今週あたりは汗ばんでしまうほどで、若者は軽装、特に女の子たちのコートの下は“ヘソ出しルック”がまだ多いようです。公園のベンチや、歩きながら至る所で、ビール瓶を片手におしゃべりを楽しんでいた人たちはめっきり減りましたが、それと入れ替わりに、高齢者や障害者の物乞いの姿が目立ちます。街中では、しばしの間の穏やかな日を楽しむ人、やがて来る厳しい寒さを前に身構えている人など、人生模様的一端が見えます。

<街の移ろい>

車がうるうる…近頃キエフでは車が増え、駐車場不足から道路や歩道の一部が駐車場になりつつあります。本来広すぎるほどの歩道ではありましたが、そこを車が移動するので、常に前の穴ぼこだけでなく、後ろも気をつけなければならなくなりました。その増えた車の3分の1か4分の1が日本車ではないかと思われるほどで、高級車もたくさん見かけます。これだけ一気に増えると、駐車場だけでなく排気ガスによる健康問題も起こってくるだろうと危惧されます。でもいったいどういう人がこんな贅沢な車を購入できるのだろうと、その傍らの物乞いの人を見比べてしまいます。

スーパーマーケット…また最近、スーパーマーケットや郊外の大型店も増えてきています。10年ほど前に、キエフで第1号のスーパーができた話題になっていたことを思い出しますが、人々は急激な消費生活の変化の波に、もまれているのではないかと思います。たまに出向くスーパーで、ワゴンいっぱい商品に投げ入れている人もいます。一方、地下鉄駅近くに必ずといっていいほどある、昔ながらのルイノク(市場)も、少しでも安いものを手に入れようとする人々が常時賑わっています。食品は比較的安価ですが、衣料品、化粧品などは高く、今のキエフでは、ある程度の収入がないと生活できないという話も聞きました。日本のコンビニのようなものはなく、あちこちに新聞・雑誌・飲み物などを売るキオスクがあります。



バスとマルシルートカ…車が増えたといっても、人々の足は公共交通機関のバス・トロリーバス・地下鉄などですが、それらの時刻表というものはありません。そのため、いつ来るかわからない(定期券を購入してある)バスを辛抱強く待つ?か、小回りが利き、速い小型乗り合いバス“マルシルートカ”に(さっさと1グリブナ払って)乗る?か、これが毎日思案のしどころです。結果、ウクライナでは、待ち合わせ時刻の「20分ぐらいの遅れは許容範囲内」という常識があります。

NPO法人チェルノブイリ救援・中部 2006年度上半期収支報告書

(2006.4.1~2006.9.30)

収入の部	
項 目	金額(円)
救援寄付金	1,992,381
個人(207件)	1,279,677
団体(27件)	712,704
運営費関連寄付金	238,000
個人(22件)	213,000
団体(3件)	25,000
補助金	0
地方公共団体助成金	258,000
民間団体助成金	600,000
雑収入	77,239
預金利子等	470
現金還不足	0
当期収入合計	3,166,090
前期繰越	8,550,413
収入総額	11,716,503

皆様の貴重なご支援に支えられ、今年度上半期も、10月21日に無事監査を終えました。

今年度は、7月から会計処理に「弥生会計」というソフトを導入した為、これまでの費目名称、データの抽出方法など、少し変わってきますが、収支報告書は、今後も従来の収支報告書に沿って作成したいと考えています。

支出面では、上半期で事業費の大半を完了していますので、今年度の収支面ではバランス上、問題なく推移していくのではないかと思います。

(監査後、費目訂正、0表示を追記した為、あらためて監査承認を受けました。)

会計担当: 綾部

支出の部	
項 目	金額(円)
事業費	4,994,901
医療機関支援事業費	900,000
医療機器提供事業	0
医薬品提供事業	900,000
保健事業費	0
粉ミルク提供事業	0
被災者団体等支援事業	1,100,000
業務委託費	500,000
奨学金事業費	0
特別事業費	450,301
派遣費	847,341
駐在員費	300,000
輸送費	453,264
文通・クリスマスカード事業費	0
海外監査費	0
機関紙発行費用	443,995
国内監査費	0
キャンペーン	0
広告宣伝費	0
管理費	1,497,202
人件費	790,500
通信・荷送費	87,448
印刷製本費	0
旅費交通費	119,290
会議費	1,700
新聞図書費	16,310
消耗品費	56,394
修繕費	33,238
事務所費	273,012
支払手数料	46,996
為替差換・両替手数料	3,314
諸謝金	4,000
団体会費	36,000
雑費	29,000
使途不明金	0
当期支出合計	6,492,103
当期収支差額	▲3,326,013
次期繰越収支差額	5,224,400
支出総額	11,716,503

上記期間の収支報告書を監査した結果、異常なく正當に処理されていることを証明します。

2006年11月12日

監査人

南 和也

事務局便り

今年9月に始動した「ナロジチ再生菜の花プロジェクト」の情報は、新聞各社によっても報道され、また、それを読まれた方からの「ありがたい」問い合わせも頂いている。チェル救でも、このプロジェクトの「宣伝用」リーフレットの作成を決定し、もうすぐ出来上がってくる。事務局・河田さんが監修し、チェル教デザイン班??の榎本さんによる力作。わかりやすく、やさしい彩りのリーフレットだ。プロジェクト展開には何より「先立つもの」が必要。このリーフレットを広く活用し、このプロジェクトの意味をご理解いただき、物心両面のご協力を仰ぎたいというのが、正直なところだ。

また、チェル救運営委員会は「助成金獲得」を目標に、各委員が申請書書きに励むこととなった。可能性はなんでも利用し、このプロジェクトを成功に導きたいとの「熱い」思い。資金獲得情報やその他このプロジェクトに役立つアイデアがあるならば、是非ともお寄せいただきたい。

さて、今、事務局には研修生2人が通ってきている。男性2人。なかなか頼もしい研修生で、事務局は「困った時の研修生頼り」を決め込み（私だけか??）、河田さんの掛け声の下、早速、事務局の整理整頓・模様替えが実現した。彼らはカード・ミルクキャンペーンを担当。それぞれの個性を発揮し、積極的に活動している。 (山盛)

追伸：ポレーシェ95号の4頁（本文2行目）の「従って今年度は合計41名に奨学金が給付されます。」は42名の誤りでした。訂正します。

編集後記

- ☆「ベトナム戦争証跡博物館」に行ってきた。写真から伝わる戦争の映像は、言葉では表現できない。写真の前に立ち、ただじっと無言で自国語の解説を読む。じわじわと迫ってくる戦争の残虐さは、胸が悪くなり吐き気を誘うような不快感だ。これも人間がしたことだ。(美)
- ☆ここ数ヶ月、仕事が忙しくなり残業の日々が続いている。家に居る時間が減ったので、おかげ様で電気代が安くなりました。世の中、悪いことばかりじゃないなあ。(佳)
- ☆先日行われた米国の中間選挙で、共和党が歴史的敗北を喫した。「イラク政策の失敗」が敗因とされているが、実は「9.11 テロは、米政府の自作自演だったのではないか？」という市民の疑惑が、その背景にある。ブッシュ大統領の弾劾裁判も始まる可能性があり、これがきっかけとなって、闇の世界が曇られていく事を願っている。日本人も、目を覚ませ！(J)



「ナロジチ再生菜の花プロジェクト」のリーフレット完成予想図

〒456-0022 名古屋市熱田区笠崎町 20-14
印刷「エープリント」
TEL・FAX (052) 871-9473